

16歳 家を出て一人、江戸へ向かう
 21歳 長崎で病に伏し、仏門に入る
 28歳 蝦夷地へ初めて足を踏み入れる
 51歳 北海道開拓使の役人に

vol. 20

松浦 武四郎

▶▶ Matsuura Takeshiro

旅に生きた 「北海道」の名付け親

▶▶▶ 旅のスタートは16歳の時の家出

松浦武四郎は1818年(文化15年)、現在の三重県松阪市で代々庄屋をつとめる家の四男として生まれた。生家はお伊勢参りでにぎわう伊勢街道沿いにあった。武四郎は幼い頃から多くの人々が旅する姿をながめたり、現代の観光ガイドにあたる『名所絵図』を愛読するうちに、未知の世界への憧れや旅というもののへの思いを醸成していったのだろうか。16歳の時、「私は江戸、京、大坂、長崎、唐(中国)、天竺(インド)へ行きたいのです」と書き置きを残して江戸へ向かった。江戸では知り合いのところに身を寄せながら、石を彫って印鑑をつくる「篆刻」のスキルを習得した。その後、一旦は両親によって実家に連れ戻されたものの、心配する父を説得し、再び旅に出た。

可愛がっていた末っ子へのはなむけとして父は旅費を渡してくれたが、それだけでは到底足りない。武四郎は行く先々で篆刻のスキルを生かして収入を得た。学があり風流な父の影響もあってか、武四郎は文章を書いたり、絵を描くことが得意な上、骨董への造詣も深かった。コミュニケーション能力も高かった武四郎は、その健脚で諸国をめぐり見聞を広げながら、篆刻の仕事を通じて出会った各地の名士や文人墨客とも親しくなっていた。

21歳で訪れた長崎では大病を患い、生死を彷徨った。それを機に仏門に入る。鎖国時代にあっても、長崎には外国からの情報が集まっていたが、それらを見聞きする中で、武四郎は外国が蝦夷地に目をつけていることを知る。長崎に住んで5年目のことだった。危機感をもった武四郎は、一度実家に立ち寄り、父母の仏前で手を合わせた後、蝦夷地を目指した。



1818年、三重県松阪市出身の探検家、地誌学者、著述家、蒐集家。全国を旅しながら、各地の様子を詳細に記録し、それらをもとに本を出版。なかでも『石狩日誌』や『北海道国郡全図』など北海道に関する本は多く、ベストセラーとなったものもあった。

▶▶▶ アイヌの暮らしや文化を知り、広める

アイヌの人たちが暮らしていた蝦夷地は、当時、アイヌ以外の人にとってほとんど未知の土地だった。28歳の武四郎はアイヌの案内人を頼りに、蝦夷地での調査を始めた。地形や距離など地理的な情報だけでなく、直接アイヌの人たちの話を聞き、地名や歴史、風習、言い伝えなどを、時にはスケッチも織り混ぜながら丁寧に記録していった。調査を重ねるうちにアイヌの言葉を話せるようになると、彼らの暮らしや文化への理解も深めていった。

41歳までの期間、6回にわたる蝦夷地の調査で得たさまざまな情報をもとに、武四郎は紀行本や地図など何冊もの本を出しているが、そこにはアイヌの人やその文化について多くの人に知ってほしいという思いがあったのではないかと。なお、プライベートにおいては、調査を終えた後、42歳で結婚し、43歳で父親となっている。

1868年、江戸幕府にかわって明治政府が発足すると、武四郎は北海道開拓使の役人として任命された。51歳の時だった。翌年には「蝦夷」の名を改めることになり、その命名を任される。提出した6つの案の中から選ばれたのが「北加伊道」で、そこから「北海道」と名付けられた。「加伊」は「この土地に生まれた者」を意味するアイヌの言葉であると知れば、「北加伊道」に込められた武四郎の思いが伝わってくるような気がする。

晩年は全国各地をめぐったり、古物蒐集の趣味に打ち込む一方、68歳から70歳まで3回にわたり三重と奈良の県境にある標高1695mの大台ヶ原の調査を行った。生涯、探求心を持ち続け、初の富士登山にチャレンジした翌年、71歳で旅の幕を下ろした。

(執筆/ライター 篠田 りょうこ)